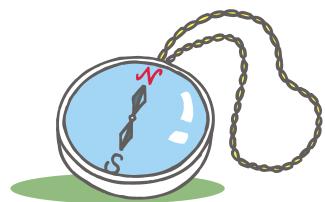


羅針盤



第 31 号

令和8年2月9日（月）

◆ 「人間万事塞翁が馬」

新しい年を迎え、3学期が始まって、すでに1か月が過ぎ去ってしまいました。新年を迎えて、立てた目標や計画の進捗状況はいかがなものでしょうか。順調に事が進んでいる人もいれば、残念ながら、目標設定の変更や計画の立て直しを余儀なくされた人もいることでしょう。時には、自分には無理なことであったと落ち込んだり、どうして自分だけは上手くいかないのだろうと考えすぎたり、どんな人でも焦りを感じる場面や不安に思うようなことがあるのは事実です。そんな時には、「人間万事塞翁が馬（にんげんばんじさいおうがうま）」という諺を思い出してみてはいかがでしょう。「人間」を「じんかん」と読む場合もあって、世間や世の中のことと意味しています。略して「塞翁が馬」ということもありますが、「塞」は要塞の「塞」で、砦（とりで）を意味していて、「翁」は老人の意味ですから、「塞翁」は塞（とりで）に住む老人ということとなります。「人間万事塞翁が馬」、この諺の元の話というのは、中国の古い書物（哲学書）である「淮南子（えなんじ）」に書かれています。『中国の北の方に占い上手な老人が住んでいました。さらに北には胡（こ）という異民族が住んでおり、国境には城塞（砦）がありました。ある時、その老人の馬が北の胡の國の方角に逃げていってしました。老人が済んでいる北の地方の馬は良い馬が多く、高く売れるので近所の人々は気の毒がって老人をなぐさめに来ました。ところが老人は残念がっている様子もなくこう言いました。「このことが幸福にならないとも限らないよ。」と。そしてしばらく経ったある日、逃げ出した馬が胡の良い馬をたくさん連れて帰ってきました。そこで近所の人たちがお祝いを言いに行くと、老人は首を振ってこう言いました。「このことが災いにならないとも限らないよ。』と。しばらくすると、老人の息子がその馬から落ちて足の骨を折ってしまいました。近所の人たちがかわいそうに思ってなぐさめに行くと、老人は平然と言いました。「このことが幸福にならないとも限らないよ。』と。1年が経ったころ、胡の異民族たちが城塞を襲撃してきました。城塞近くの若者はすべて戦いに行きました。そして、何とか胡から守ることができましたが、その多くはその戦争で死んでしまいました。しかし、老人の息子は足を負傷していたので、戦いに行かずに済み、無事でした。』というお話です。この話は「物事の浮き沈みに一喜一憂してはいけない」ということを教えてくれます。上手くいっているときも慢心せず、上手くいっていない時も落胆することなく、いつも心を整えておくことの大切さを教ってくれる故事成語です。「不幸（災い）」と思えることが、後には「幸い」となることもあり、またその逆もあるというたとえであり、人生における幸せや不幸せは予測しがたいことであり、良いこともあれば悪いこともある、皆さん自身



も「禍（わざわい）転じて福となす」といった言葉を聞いたことがあるかと思います。これから先の長い人生では、いろいろな試練が待ち受けています。そのような時に、大切なことは、自分の心の持ちようといったことではないでしょうか。安易に、悲しんだり、喜んだりするのではなく、幸せであろうとする意志や、楽しくあろうとする意識を持ち続けることにこそ、生きていくうえでの大事な意味があるはずです。この言葉は、人生をとても豊かにしてくれるものだと思います。